

目次

はじめに	4
------	---

第1章 コンプライアンスとは何か

1. コンプライアンスとは	5
2. CSRとコンプライアンスの関係	7
3. 企業法務（リーガル）とコンプライアンスの関係	10
用語解説	12
確認テスト	13

第2章 コンプライアンスの重要性

1. 頻発する企業不祥事と社会環境の変化	14
(1) 頻発する企業不祥事	14
(2) 企業を取り巻く環境の変化	15
(3) 信頼回復に努める産業界	16
(4) 企業不祥事の顛末	21
(5) 企業不祥事の原因	23
2. 企業を取り巻く法規制の変化	26
(1) 法規制	27
(2) 行政・司法との関係	30
(3) 企業の株主との関係	31
3. コンプライアンス重視のメリット	33
用語解説	39
確認テスト	40

第3章 コンプライアンス論の歴史

1. コンプライアンスに関する米国の歴史的背景	41
(1) アメリカにおけるコンプライアンス論の確立	41
(2) 連邦量刑ガイドラインの内容	42
用語解説	45
確認テスト	46

第4章 コンプライアンスのための組織づくり

1. コンプライアンス体制構築のための基礎	47
2. 取締役会の役割	48
3. 取締役の役割	50
4. 監査役・監査役会の役割	50
5. コンプライアンス委員会の役割	51
6. コンプライアンス統括部門の役割	51
7. コンプライアンス・オフィサーの役割	55
8. コンプライアンス担当者の役割	57
用語解説	58
確認テスト	59

第5章 コンプライアンスのための取り組み

1. 経営理念・行動指針・倫理綱領	60
(1) 経営理念	60
(2) 行動指針	60
(3) 倫理綱領	60
2. コンプライアンス・マニュアル	61
3. コンプライアンス・プログラム	62
4. コンプライアンス研修	62
5. 内部通報制度	63
(1) 通報の範囲	63
(2) 通報者の対象	63
(3) 社内窓口	64
(4) 社外窓口	64
(5) 通報者の保護	64
6. 各業務の現場におけるコンプライアンス	64
(1) 総論	64
(2) 営業部門におけるコンプライアンス	72
(3) 管理部門におけるコンプライアンス	77

7. 不正を発見した場合の措置	80
(1) 公益通報者保護法の概要	80
(2) 労働者とは	80
(3) 不正の目的とは	81
(4) 誰の何を対象とする通報か	81
(5) どのような状況での通報か	82
(6) 誰に通報するか	82
(7) 通報対象事実とは	84
(8) 保護要件	85
用語解説	90
確認テスト	91

はじめに

1990年代半ば頃から、わが国でもコンプライアンスという言葉をよく耳にするようになりました。その後、企業をとりまく経済環境、規制環境や消費者意識の変化等を背景として、今やこの言葉は広く社会に浸透しました。

しかし、企業による不正や事件は一向に減少する気配がありません。多くの企業で、多大なコストをかけてコンプライアンスの仕組みを整備しているにもかかわらず、状況に改善が見られないのはなぜなのでしょう。

このような疑問から、コンプライアンスの定義について従来の形式論ではなく、その本質的な意味からの検討がされてきました。コンプライアンスを単に「法令を遵守すること」と捉えた場合に、さまざまな弊害が生じるため、「経営理念や企業倫理を浸透させ、これを遵守すること」という捉え方がなされるようになってきています。すなわち、コンプライアンスとは、不祥事の防止や法規制への対応といった「やむを得ず対応すべき事項」というものではなく、企業の存在意義をベースとした「積極的に取り組むべき経営上の課題」であるという理解です。

本書は、社会人であれば誰もが知っておくべきコンプライアンスの機能や役割を的確に理解するため、コンプライアンスの基本を解説します。本書によって読者の皆様がコンプライアンスの本質に対する理解を深め、勤務先等でのコンプライアンス業務の推進等に役立てていただければ幸いです。